

X II. その他、献血に対するご意見ご感想があればご自由にお書きください。



ご協力ありがとうございました。

- ⑥ 治療に必要であっても輸血はしたくない 【 4 3 2 1 】
- ⑦ 輸血はもったいないから1滴も無駄にできない 【 4 3 2 1 】
- ⑧ 輸血は時間がかかって苦痛だ 【 4 3 2 1 】
- ⑨ じんま疹などの輸血の副作用が心配だ 【 4 3 2 1 】
- ⑩ 輸血したことで病気に感染することが心配だ 【 4 3 2 1 】
- ⑪ 献血してくれる人は善意がある 【 4 3 2 1 】
- ⑫ 輸血を受けて人は、献血してくれた人に感謝している 【 4 3 2 1 】
- ⑬ 輸血したことで、献血の重要性がわかった 【 4 3 2 1 】
- ⑭ できるならば、献血を広める活動に参加したい 【 4 3 2 1 】
- ⑮ 献血の重要性を知らない人が多い 【 4 3 2 1 】

VIII. 毎年行なわれている「はたちの献血キャンペーン」を知っていますか？

- ①はい ②いいえ

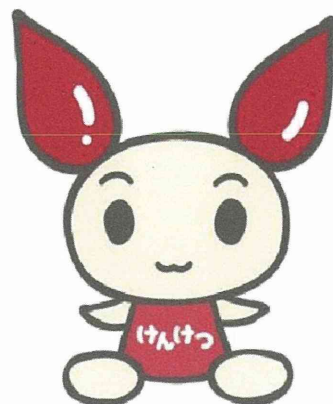
「はい」と答えた方にお尋ねします。何を見て知りましたか？（複数回答可）

- ①新聞 ②広報誌 ③テレビ ④ラジオ ⑤雑誌
⑥インターネット ⑦ポスター
⑧その他（ ）

IX. 献血推進キャラクターの「けんけつちゃん」を知っていますか？

- ①はい ②いいえ

X. その他、献血に対するご意見ご感想があればご自由にお書きください。



ご協力ありがとうございました。

3

供血者の実情調査と献血促進および阻害因子に関する研究

研究分担者：大西 雅彦（日本赤十字社 血液事業本部）

研究協力者：井上 慎吾（日本赤十字社 血液事業本部）

照井 健良（日本赤十字社 血液事業本部）

大友 貴子（日本赤十字社 血液事業本部）

研究要旨

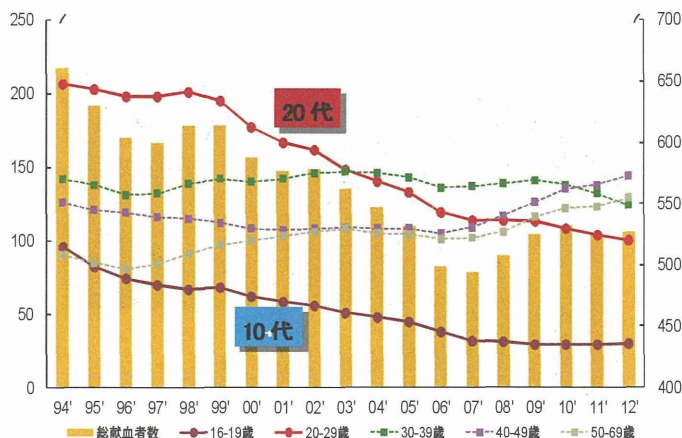
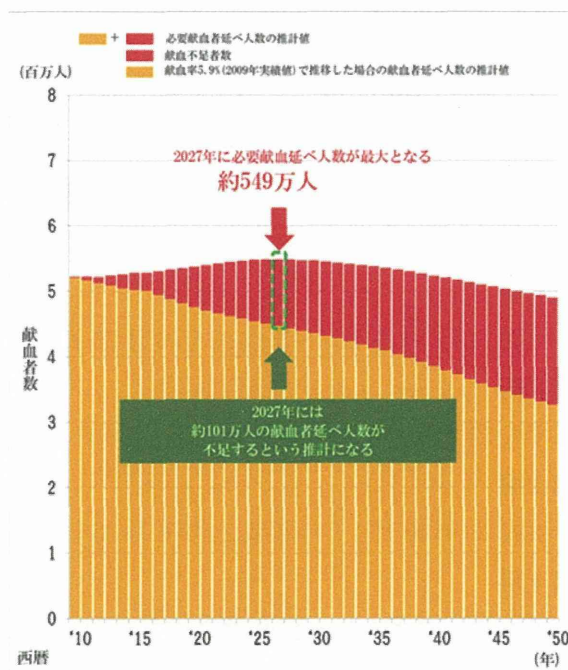
医学の進歩によって臓器移植が可能になるなど、治療における輸血用血液製剤の需要は高まり、特に、改正臓器移植法の施行に伴い緊急かつ大量輸血の事例が増加している。今後安全な血液を如何に安定的に確保するかが重要な課題である。厚生労働省が実施した若年層意識調査の結果及び検証を踏まえて検討された「献血推進のあり方に関する検討会」報告においても輸血用血液製剤の需要の増加にも拘わらず、若年層の献血離れの傾向に歯止めがかからないことが指摘されている。その理由が明らかにされていないことから、平成 21 年度から本研究において献血推進における広報の効果に関する研究を実施してきた。今後は、安全な輸血用血液製剤の安定的な確保のために、これまでの研究を踏まえ、献血の実情を明らかにし、その原因の解明を行い、さらなる対策を提示することが重要と考えられる。

研究目的

日本赤十字社が平成 22 年に行った血液需給将来推計シミュレーションでは、現在の献血率（献血可能人口の献血率 5.9%）のまま少子高齢化が進展すると、需要がピークを迎える平成 39 年（2027 年）には、献血者約 101 万人分の血液が不足することが予測されている。

また、今後の安全な輸血用血液製剤の安定的な確保のためには、献血の実情を明らかにする必要がある、その中でも、ここ 10 年で 40%も献血者数が減少している 10 代、20 代の若年層については、献血離れの現象があるとすれば、その原因の解明を行い、献血推進に向けた戦略的な広報を開発することにある。

本研究は、需要量に見合った献血量を確保し安定供給を図る上で極めて重要であり必要性は高い。



研究方法

平成21年10月から、メディアを活用した戦略的な広報展開として、インターネット、携帯サイト、ラジオ放送（継続した全国放送、地域における放送）等による広報や、よりインパクトのある音楽イベントによる啓発等を軸とした、通年での継続性のある展開を図り、広報前後での献血行動の分析から広報の効果を評価する。

献血推進の広報に必要な伝えるべきメッセージは何か、特に若年層にメッセージを伝える媒体や伝達方法などを十分に解析、検討して、広報の戦略を立て、広報の効果については献血者の属性毎の人数の分析やキャンペーンによる広く国民からのメッセージ収集等を行い、献血の意識付けも含めた評価を行う。

プロジェクトにおける主な実施事項

① 全国におけるラジオ放送の実施

JFN（株式会社ジャパンエフエムネットワーク）38局による全国ネットでの放送。プロジェクトリーダーのラジオDJ山本シュウ氏と第3期からはフリーアナウンサー、キャスターとして各メディアで幅広く活躍されている小林麻耶氏による番組を放送。

第1期

平成21年10月1日～平成22年6月30日

第2期

平成22年7月1日～平成23年6月30日

第3期

平成23年10月1日～平成24年6月30日

第4期

平成24年7月1日～平成25年6月30日

※平成23年7月～9月は、リニューアルにともない一時休止



② 各地域におけるラジオ放送の実施

後援団体である JFN（株式会社ジャパンエフエムネットワーク）加盟各局番組内における啓発を実施（各局1番組～3番組で約10分程度）

③ 各地におけるイベントの実施（平成25年1月31日時点）

北海道札幌市、秋田県秋田市、岩手県盛岡市、宮城県仙台市、福島県郡山市、愛知県名古屋市、富山県高岡市、石川県金沢市、岐阜県大垣市、大阪府大阪市、滋賀県大津市、岡山県岡山市、広島県広島市、香川県高松市、徳島県徳島市、高知県高知市、福岡県福岡市、宮崎県宮崎市、沖縄県那覇市



④ ファッションイベントとのタイアップ

若年層に人気のファッションブランドとコラボレーションを実施し、タイアップブランドが参加しているイベント時に広報資材の配布や、スクリーンによる映像配信を実施、

※ ブランドの商品に LOVE in Action ロゴを掲示、ファッションイベントでの映像放映等



⑤ 各種広報との連動

通年で実施している、本プロジェクトを軸に各種広報を連動させることにより、より効果的な啓発を実施。

特に、はたちの献血キャンペーンに関しては、
 LOVE in Action プロジェクトに賛同していただいたアーティストが、キャンペーンCMの楽曲を提供してくれることにより、記者発表会でのメディア効果や、CM放映等、インパクトのある啓発を実施。
 ※CMソング賛同アーティスト

メティス、ゆず、MONKEY MAJIK、平井堅

⑥ 音楽イベントの開催

第1期 グランキューブ大阪

C.C. レモンホール (現渋谷公会堂)

※応募総数 8,220 人、来場者数は、3,980 人



第2期 日本武道館 (2日間開催)

※応募総数 70,982 人、来場者数は 19,485 人

※サブ会場として日本製紙クリネックススタジアム宮城 (1日目のみ)



第3期 日本武道館 (2日間開催)

※応募総数 62,372 人、来場者数は 16,037 人

※全国 6 会場の映画館で映像配信 (1日目のみ)



研究結果

若年層に献血の意義を伝え、献血行動を促すことを目的に、通年で実施してきた「LOVE in Action プロジェクト」について以下の結果が得られた。

① 平成 21 年度の献血者数は、5,303,431 人、平成 22 年度 5,329,676 人、平成 23 年度 5,250,866 人となっており平成 19 年度の 4,955,954 人以降 500 万人を割ることなく推移している。

年代別にみると、平成 21 年度の 10 代は 293,696 人 (人口比 6.0%)、20 代は 1,126,931 人 (人口比 7.8%)、平成 22 年度の 10 代は 295,775 人 (人口比 6.1%)、20 代は 1,080,814 人 (人口比 7.9%)、平成 23 年度の 10 代は 285,021 人 (人口比 5.8%)、20 代は 1,018,234 人 (人口比 7.5%) であり減少傾向となっている。

② ラジオによる啓発については、リスナーからの投稿数が、第 1 期から順調に伸びており、第 1 期～第 3 期で約 8,000 通が寄せられた。後援団体である、株式会社ジャパンエフエムネットワーク (全国 38 局) 加盟局のネットワークを通じ、全国に献血の情報を繰り返し放送することによる効果が表れていると思われる。

また、投稿数に占める若年層 (29 歳以下) からの投稿数についても増加傾向にあり、若年層への継続的な献血啓発の効果が認められた。

★広島県 (10 歳)

しゅうさん、まやさん、こんばんは。いつも、学校に行くときに、献血バスをみかけます。それをみると、「早く献血が出来るようになればいいな」とおもいます。いつでも、元気なしゅうさんや、まやさんの声を聞くと、献血は、自分たちにとって、とても身近なものなんだなと、思います。これからも、頑張ってください。

★沖縄県 (11 歳)

シュウさん、麻耶さんコンバンワ。私は、せっせと献血に通うお父さんを見て、将来自分も献血したいと思っている小 6 生です。お父さんはこの前、今年 10 回目の成分献血に行きました。私も献血ルームについて行きました。献血ルームのスタッフの皆さん、とっても笑顔が素敵で大好きです。ラブステシートお願いします。

★愛媛県 (14 歳)

シュウさんまやっちゃんこんにちは!!いつもラブインアクション聞いてます!いつも、母が献血をしています!!自分は今 14 歳なのでまだ献血をすることができませんが、16 歳になったら母と一緒に献血に行きたいです!!

★宮城県 (16 歳)

初めてメールします。あの、私は献血したことがなくて、スゴくしてみたいんです!でも、高校生なので平日はいけなしい、土曜日も部活動が入ったりして、近くに献血できる場所もないし。。

日曜日でも献血ってできるんでしょうか? どこでできるんでしょうか?わかるサイトってありますか?私の血が役立つならいくらでも提供したいなあ、と思います。空の下でみんな同じ。人が人を救う。当たり前だけど簡単に出来ないから、少し怖いけど勇気持って献血へ。同じ空の下の誰かの為に。そんな気持ちを込めて、この歌をリクエストします。よろしくお願いします!

★山口県 (16 歳)

シュウさん麻耶さんこんばんは!はじめまして!今日人生初献血センター行き&ファミ献してきました。去年の 12 月に 16 歳になったので、行ってみようか、ってことになったんです。父は結構献血をしているみたいで、なれた様子でしたが、センターに行くのすら初の私や妹はドキドキ。書類とか書く手も震えてました。そしてやっと血液検査まで到達・・・!と思ったら。「寒さで血管が収縮して危険なので今日はやめときましょう」のひとこと……。拍子抜けというか、残念というか、複雑な気分になりました。あつたかい季節になったら再チャレンジしようと思います……。とりあえず今はなんかショボンとしているので慰めてくださいです(´;ω;`)ラブステシート欲しいです。

★長野県 (17 歳)

シュウさん、マヤさん、はじめまして!love in action が朝やっていた時からこの番組を聞いていましたが、初めて書き込みしました☆わたしは献血について、高校独自の新聞で献血を体験した先輩の体験記を見て「今の私にも人助けが出来るんだ!」と知り、私もやりたいと思い、やり始めました。初めは入るのも緊張しましたが、入って見たらとても優しく教えてくれて安心でした!まだ、3 回しか出来ませんがこれからもずっと定期的にやり、私の血で誰かが助かるのならどんどんやりたいです!これからも、ラジオの前で聞いてます!

★山形県 (18 歳)

初投稿です!しゅうさんまやさんこんばんは!私は、二週間ほど前に、学校の授業の一環にある“三分間スピーチ”で献血について話しました。上手く伝えられたかわかりませんが、そこにいた人みんなに一生懸命話せたと思います!まだ私は献血をしたことがありませんが、いろいろ落ち着いたら行ってみたいと思います♪しゅうさんまやさん、これからも頑張ってください(*ymy*)応援してます!

★鹿児島県 (18 歳)

自分はラグビー部に入っていました。そのため怪我が多く献血に行っても「怪我の直りが悪くなるから申し訳ないけど次来てね」といつも友達の献血を待つ始末。しかしこの前部活を引退し念願の献血をすることが出来ました!とてもすがすがしい気持ちになりました。さて、今は受験勉強が忙しくて周りを献血に誘う暇がありませんが、晴れて大学生になることが出来たら皆を誘って‘友献’しようと思います。シート下さい。

★栃木県 (20 歳)

この前の日曜日に献血に行きました。今まで通りすぎていましたが、このラジオを聴いて献血をしようと思いました。シート下さい。

★宮崎県 (21 歳)

昨日、ちょうど大学に来ていたので 400ml 献血してきました!大学 1 年から始めて通算 8 回目!これからも年齢制限がかかるまで続けるつもりです!こんな私にラブステシートをください!

★愛知県 (22 歳)

こんにちは!初メールです!実は今まで献血に行った事はありません!仕事上行く時間が無いて事も注射が苦手って事もありますがこの番組を聞いて『自分も献血行きたい』って思えたので機会があったら彼女と一緒に行ってきます!ラブステシート欲しいです!

★長崎県 (23 歳)

昨日、生まれて初めての献血に行ってきました。きっかけはこの番組で、献血の大切さを知り、献血をしようと思いました。これからも献血を続けていこうと思います。

★福岡県 (25 歳)

シュウさん、麻耶さん、こんばんは!!いつも楽しく聴かせてもらっています。最近、献血バスが大学構内によく来ています。自分は今持病のため献血ができないのですが、その分、友達や先輩後輩、果ては先生にも声をかけて献血を薦めていますよ。出来る人はドンドン献血に参加して欲

しいです!!そして早く自分も献血復帰したいと思います。

★島根県 (27 歳)

この番組を聞いたきっかけで、昨日約 8 年ぶりに献血に行ってきました。これからはどこかで待ってる親戚のためにも定期的に献血にいかうと思います。

★福島県 (29 歳)

いつも楽しくラジオを聴いています。ご当地大作戦 in 福島、行かせてもらいました。イベントでは、三瓶さんののんびりしたネタとキャラにほのぼのした気持ちにさせてもらい、音速ラインのライブに元気をもらいました。そしてラジオと変わらない、(ラジオ以上?) 生のシュウさんのトークもとても楽しかったです! いっぱい笑わせてもらいました。終了後、シュウさんとお話できて、うれしかったです。サインもしていただきありがとうございます♪あその後、献血バスで 400ml 献血していきました。あと 2 回で 10 回の献血となるので、まずは 10 回を目指して、献血を続けていきたいです。これからもラジオ楽しみにしています!

★北海道 (32 歳)

シュウさん、小林さん、こんばんは。昨日のイオン発寒のイベント見に行きました。この番組は、朝やっていたときに聞いていて、おわっちゃったのかなあ思っていました。イベントで、まだやっていることを知りました。小林さんは、「恋のから騒ぎ」にはじまり、TBS、ラジオと生で見たことありませんでした。今回、生で見れて、うれしかったです。声もラジオと同じでした。周りの雰囲気が明るくなりました。じゃんけん大会のときに、小林さんが、テンションあげあげで、盛り上げているのに、観客がのってこなかったのは、小林さんのせいじゃないんです。道民は、シャイなんです。がんを克服した少女のはなしをきいて、がん治療に輸血が必要なのは、知りませんでした。注射をするときに、血の気がひいちゃいますが、できる限り、輸血したいと思います。小林さんもシュウさんを連れて、また北海道きてください。WE are 親戚。

★徳島県 (34 歳)

お疲れ様です。いつも、聴いています。昨日、近くに献血車が来ていたので、娘たちを連れて、400ml 献血に行ってきました。娘たちは、まだ、献血できる年齢になっていませんが、献血できる年齢になったら一緒に献血行こうと思います。

★静岡県 (37 歳)

私は、腎臓病のため輸血する事ができず番組を聴いていても参加できずにいました。どうせ役に立たないと思って

いたら前回の放送を聞いて、私にも出来る事を見つけました。友達、家族に献血のお願いです。こんな私でも仲間にしてもらえますか?

- ③ 各地におけるイベント会場のアンケート調査の結果から、10 代~20 代の回答割合は、第 1 期 54.9%、第 2 期 47.5%、第 3 期 52.5%と高い値を示しており、また、第 1 期~第 3 期を通して全体の約 4 割が献血未経験者であることから、特に若年層をターゲットとした献血への動機付けの観点からは十分評価できる内容であった。

また、イベントにおける認知経路としては、本イベントの軸であるラジオ、テレビが第 1 期 14.8%、第 2 期 49.2%、第 3 期 54.9%となっており、メディアを活用した戦略的広報も十分評価できる内容であった。

- ④ インターネット調査(全国の 16 歳~69 歳男女、各 1,000 人対象)の結果から、LOVE in Action プロジェクトの認知率は、第 1 期 10 代 13.8%、20 代 22.3%、第 2 期 10 代 43.3%、20 代 38.7%、第 3 期 10 代 52.3%、20 代 43.3%と増加している。

認知経路としては、ポスター、献血会場、テレビ CM、テレビ番組が上位を占めており、特に若年層については、テレビ CM、番組が認知経路として増加している。第 3 期におけるラジオの認知経路が高かったのは、20 代~40 代となっている。

また、本プロジェクトを知ったことによる意識や行動の変化として、「献血をしたくなった」は、第 1 期 10 代 31.6%、20 代 22.6%に対し、第 2 期は、10 代 40.8%、20 代 29.3%、第 3 期は 10 代 42.7%、20 代 24.4%、「実際に献血をした」は、第 1 期 10 代 3.3%、20 代 5.4%に対し、第 2 期は、10 代 20.8%、20 代 28.4%、第 3 期は 10 代 17.8%、20 代 30.5%となっており、献血への意識が高まった効果が見られた。

これらの結果から、広報効果について十分評価できる内容であったと推測される。

考察

全国的に通年で実施している「LOVE in Action プロジェクト」については、ラジオ放送、インターネット、携帯サイト、各地でのイベント等による献血啓発や、よりインパクトのある音楽イベント等を軸

とし、継続した展開を実施することにより、若年層を中心に、メディアを活用した戦略的な広報として、一定の効果があるものと推測される。

結論

当該プロジェクトについては、2009年のスタート以来様々な広報展開を実施し若年層に対しての献血への理解、動機付けをし、最終的に献血そのものへ繋げるための手段及び広く国民への周知、特に献血ができない年齢の若年層（15歳以下）への啓発を実施してきたが、これまでの研究結果から、今後も継続していく必要があるものとする。また、今後は将来の献血基盤となる若年層への献血の意識付けを図るためにも、学生献血推進ボランティアの協力や、本プロジェクトに賛同いただいている著名人（現役の大学生）の方々等の協力も得ながら、同世代からの献血啓発等を強化し、献血に結びつける効果的な取り組みも視野にいれる必要がある。

同時に、献血未経験者へのアプローチも重要であることから、献血未経験者の反応も含めたアンケート調査の詳細分析等、効果測定を継続して実施し、今後の展開に活用していく必要があるものとする。

健康危険情報

該当なし

知的財産権の出願・取得状況

該当なし

研究発表

該当なし

4

献血推進に向けた職員の研修方法に関する研究

研究分担者：井上 慎吾（日本赤十字社 血液事業本部）

研究協力者：照井 健良（日本赤十字社 血液事業本部）

酒森 秀則（日本赤十字社 血液事業本部）

井上 卓（日本赤十字社 血液事業本部）

大友 貴子（日本赤十字社 血液事業本部）

研究要旨

より安全な輸血用血液製剤を安定的に供給するためには、日常からより有効となる献血推進を展開する必要がある。近年は、特に若年層献血の減少、献血離れの現象があることが指摘されており、同研究事業では「供血者の実情調査と献血促進及び阻害因子に関する研究」において、その原因の解明を行い、献血推進に向けた戦略的な広報の開発研究に取り組んでいる。一方で、広報展開も含めたより有効な献血推進を継続的に実施し、目標を達成するためには、職員や学生献血推進ボランティア等のスキル向上が不可欠であり、今後も理想的な研修モデルを構築することが重要である。

研究目的

今後、需要増加が見込まれる輸血用血液製剤の安定供給を確保するためには、献血者と身近に接する献血受付担当職員や献血後の対応をする接遇担当職員のスキル向上はもとより、学生献血推進ボランティア等の意識向上を図ることが重要であり、本研究の必要性は高い。

研究方法

1. 献血者数の減少傾向が続いている若年層（10代・20代）への取り組みとして、同世代からの献血啓発等の働きかけを強化し、将来の献血基盤を構築することが重要であることから、全国的に組織されている学生献血推進ボランティアを対象とした研修スキームの充実を図り、より能動的かつ有効な献血推進活動に繋げるために「平成24年度全国学生献血推進代表者会議」（平成24年8月7日（火）から9日（木）：福岡県91名参加）を実施した。研修内容は以下のとおり。

2. 献血受付や接遇を担当する職員のスキル向上のためには、これまでの集合研修それに伴う伝達研修体系から、献血現場での個人指導及び伝達研修へと見直す段階に入った。

① 情報提供によるスキル向上

採血事業者である日本赤十字社から、献血の

現状とこれからの献血推進広報のあり方等についての情報提供を行った。



② 体験発表による意識向上

「命を見つめて」と題し講演をいただき、亡くなられたお子さんの闘病生活をもとに輸血を受けられたご家族の立場から、献血者への感謝について会場の学生ボランティアに話された。



③ 活動報告によるスキル向上

会場の学生ボランティアと同じ世代である高

校生から献血活動報告「私たちの献血活動」を発表いただき献血啓発について意見交換が行われた。



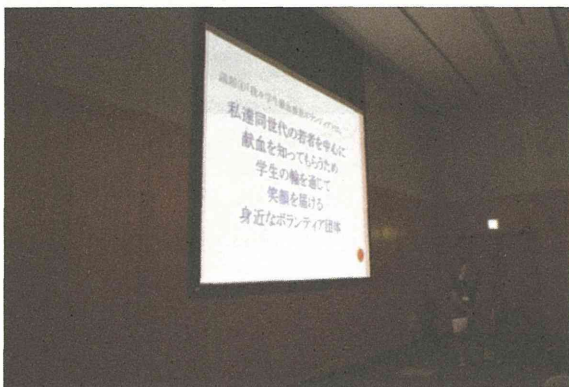
④ グループ討議によるスキル向上

「献血経験者が献血未経験者を誘い、同世代が同世代を今後の献血行動に繋げるための推進活動を行ううへで、活動の意義等について各議題に基づきグループ討議を行った。

(グループテーマ)

クリスマスキャンペーン等のイベント以外

- 今までにやってきたこと、その目的の確認
- これからの活動において我々学生に求められるものとは
- なぜ、学生が献血推進活動を行うのか
- 我々学生献血推進ボランティアとは



研究結果

グループ討議により導き出された意義等の概要は以下のとおりである。

- 今までにやってきたこと、その目的の確認
 - ・SNSによる広報・情報宣伝活動
 - ・ラジオ・TVなどの広報活動
- これからの活動において我々学生に求められるものとは

- ・学生ならではの手作り感
- ・献血の知識を増やし自身の成長
- ・次の代に繋げる献血活動
- ・広報の工夫
- ・行政に働きかける。
- ・学生が主体になれる場所を作る。
- ・献血を広めていく学生同士のつながり
- ・柔軟で新しいアイデアを生み出す。
- ・ボランティアに対する意識向上
- ・小中学生への献血講義
- ・他県の学生との交流
- ・献血をもっと身近なものにするため、明るい、立ち寄りやすい雰囲気づくり
- ・この活動を経験しているのちの大切さを知り人を思いやる心を育み、卒業後も何等かの形で献血運動に取り組んでいく。
- ・専門学生の協力によるネイルアートやハンドマッサージによる集客
- ・キッズコーナーを設ける。
- ・学生独自のオリジナル処遇品
- ・学生による献血セミナー
- ・学内での献血教室



●なぜ、学生が献血推進活動を行うのか

各グループの回答の共通内容として、若年層に献血を呼びかけるには、学生に呼びかけられることにより、より身近に感じてもらい献血へのきっかけに繋がる。

また、自ら献血に興味がなかった頃があることから「どうしたら献血に興味を持ってもらえるか」を考え、アイデアを出して活動でき、同じ立場で献血の啓発を生み出すことができると考えている。

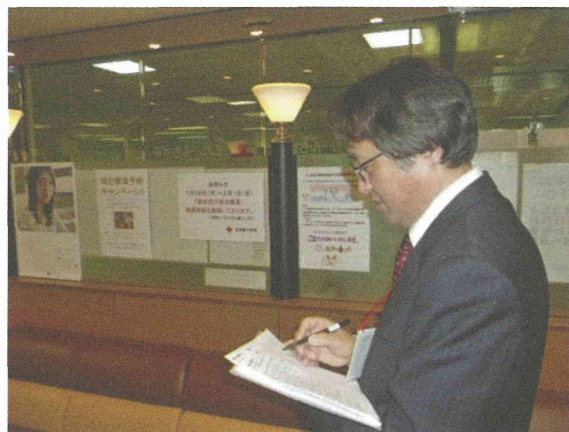
●我々学生献血推進ボランティアとは

- ・私たち同世代の若者を中心に献血を知ってもらうため、学生の輪を通じて笑顔を届ける身近なボランティア団体。
- ・学生=絆+成長+楽しむ つまりプライスレス
- ・同世代を中心に献血のきっかけをつくり、献血をより身近なものにしていく団体
- ・献血と人間の緩衝剤
- ・楽しく！献血を広めていく団体
- ・献血者と患者さんを繋ぐ懸け橋
- ・患者さんと一般の人とを繋ぐ架け橋
- ・献血への扉を広げてあげる。
- ・みんなのきっかけをつくる。
- ・情熱

献血受付担当職員や接遇を担当する職員に対して、献血者が再び献血会場へ来ていただけるためには、特に受付・接遇に携わる職員のスキル向上を図ることが重要であり、職員のスキル向上は献血者に対してより快適な環境を提供し、安全性を確保する観点からもその果たす役割は極めて大きいものがある。このことから、これまでの集合研修それに伴う伝達研修体系から実際の献血現場における個人指導及び伝達研修へと見直す段階に入った。これまでの研修では、献血者とのコミュニケーション向上を重点に置いた内容で、代表者に対する集合研修を行い、代表者がその他の職員に伝達研修をする方法で行っていた。

平成24年度は、試行実施ではあるが、研修体系を個人指導による研修体系へ見直しを図った。研修内容については、十分な検証を行ったうえで、今後の研修体系の構築をめざすこととしている。研修内容は以下のとおり。

- (1) 現状把握から問題点の発見、改善策の提案、実行によるCS（顧客満足度）強化
- (2) 職員がそれぞれ個人で日々を振り返った情報共有
- (3) 個人面談及び職場全体への評価（基本の挨拶・姿勢・態度・献血者への説明や配慮）



(接遇講師による職員チェック)

考察

学生献血推進ボランティアを対象とした、研修については、将来の献血基盤となる若年層への献血の意識付けとして重要なものと考えられる。特に有効な情報提供（献血の現状、献血した血液の使われ方等）をすることで個々の意識向上が見られたことや、グループ討議の内容（学生独自の広報活動：専門学校学生によるネイルアート、ハンドマッサージ・オリジナル記念品の製作、学生自身による献血セミナー・学内での献血教室）や導き出した結果からは組織として積極的に取り組む姿勢が認められた。

これらのことから、より有効な情報発信を行っていくことが今後の学生献血推進ボランティアの意識向上に繋がり、現在299大学5,171名の組織が更に広がっていくものと考察される。

結論

学生献血推進ボランティア組織は、若年層へ向けた同世代からの情報発信を行うためにも、極めて重要な位置付けにあるため、引き続き全国の学生ボランティアの研修を行っていくことはもとより、現在、日本赤十字社で実施している若年層へ向けた献血啓発プロジェクト「LOVE in Action プロジェクト」における各地でのイベント参画等が、将来の献血基盤となる10代・20代の献血啓発を行っていくうえでの有効なスキームとなっていくものと考えられる。

また、職員のスキル向上については、複数回献血者に繋がるものと考えられることから、研修体系と充実した研修内容を確立することが必要と考える。

健康危険情報

該当なし

知的財産権の出願・取得状況

該当なし

研究発表

該当なし

5

献血率に与える要因分析と効果的な施策のあり方に関する研究

研究分担者：河原 和夫（東京医科歯科大学大学院 政策科学分野）

研究協力者：菅河真紀子（東京医科歯科大学大学院 政策科学分野）

丸山 智久（東京医科歯科大学大学院 生命情報学分野）

研究要旨

厚生労働省が行っている「若年層献血意識に関する調査」は、単純集計のみで統計学的な検討が行われていないため、献血者確保に何が有意に影響を及ぼしているかを知る術がなかった。

本研究は、「平成 23 年若年層献血意識に関する調査」のデータを用いて献血経験者と献血未経験者との献血に対する意識や行動の差を見たものである。

献血呼びかけの広報媒体としては、「テレビ」で見たことがある場合は献血経験がない傾向、「献血ルーム前の看板・表示」「ポスターの掲示」「自治体の広報誌」で見たことがある場合は献血経験がある傾向であった。

「テレビ」は必ずしも有効な広報媒体となっていない一方、特に「献血ルーム前の看板・表示」については大きな影響が見られた。また、家族が献血している姿を見たことがあるかについては、「ある」と回答した場合は献血経験がある傾向があった。このように家族が献血しているところを見たことがあるという経験は、献血行動に結びついていた。献血経験がある友人を有している場合と献血行動であるが、「いる」と回答した場合は献血経験が多くあり、「いない」と回答した場合は献血経験が少ないことが確認された。

これらのことから、献血ルーム等の看板の設置場所や呼びかける職員が待機する場所などを工夫することにより、新たな献血者の発掘が可能になることがわかった。また、家族や友人の献血している姿を「見たことがある」者は献血行動をとりやすいことから、これら身近な人間を介して献血思想を普及していく方策を考えることも重要であるという結果が得られた。

研究目的

年齢階級別の献血率は、経年的に大きな変化を示しているが、その要因が十分に分析されているとは言い難い。また、若年層の意識調査を 3 年に 1 度実施しているが、統計学的な手法を用いた詳細な分析がなされていないことから、本研究は厚生労働省が平成 23 年 10 月に公表した「若年層献血意識に関する調査」のデータを統計解析したものである。その結果は今後の若年者の献血者確保に資するものと考えられる。

(倫理面への配慮)

個人情報は一切含んでおらず、倫理的問題は生じない。

研究方法

前述の「平成 23 年若年層献血意識に関する調査」のデータを用いて献血経験者と献血未経験者との献血に対する意識や行動の差を見た。資料 1 にある

「献血経験者」と「献血未経験者」に対する質問のうち、表 1 に示す共通する質問項目を分析の対象とした。目的変数を「献血経験の有無」とし、説明変数を質問項目のうち「地域 Area」「年齢 Age」「性別 Sex」「職業 Occupation」「医療機関への従事 Med」「見たこと（聞いたこと）がある広報媒体 Media」「家族の献血経験者の有無 Exp_Family」「友達の献血経験者の有無 Exp_Friend」「献血に対する知識 Knowledge」とした。

調査対象は、献血経験者 5,000 名と献血未経験者 5,000 名の合計 10,000 名とし、全国を 7 ブロックに分け、各ブロックの若年層人口 (16～29 歳) の全国に占める割合を平成 22 年住民基本台帳年齢別人口のデータに基づき算出し、ブロックごとの回収数を決定した。

分析は、SPSS 12.0、R 2.10.0 を用いた。まず、 χ^2 分析を行い、有意な関連が認められた変数を用いてロジスティック回帰分析を実施した。

表 1 分析で使用する変数と質問項目

	変数名	対応する調査データ
目的変数	献血経験の有無 Kenketsu	○スクリーニング用 問 6
説明変数	地域 Area	○スクリーニング用 問 1 →経験者と未経験者で 構成が揃えられてい たため、使用せず
	年齢 Age	○スクリーニング用 問 2
	性別 Sex	○スクリーニング用 問 3
	職業 Occupation	○スクリーニング用 問 4
	医療機関への従 事 Med	○スクリーニング用 問 5
	見たこと (聞いた こと) がある 広報媒体 Media	○献血経験者用 問 6 ○献血未経験者用 問 10
	家族の献血経験 者の有無 Exp_Family	○献血経験者用 問 24 ○献血未経験者用 問 22
	友達の献血経験 者の有無 Exp_Friend	○献血経験者用 問 25 ○献血未経験者用 問 23
	献血に対する知 識 Knowledge	○献血経験者用 問 1、 問 2、問 3、問 4、問 5、 問 12、問 13 ○献血未経験者用 問 5、問 6、問 7、問 8、 問 9、問 16、問 17 →上記の設問について、 知っている個数を使用

また、献血ルームの献血者確保の実態を把握するために、福岡市の献血ルームの訪問調査を行った。その結果は資料 2 として添付している。

研究結果

1 平成 23 年若年層献血意識に関する調査結果

(1) 献血未経験者

「平成 23 年若年層献血意識に関する調査」の献血未経験者の結果を引用すると、単純集計では「献血に関する広報接触媒体」としては「献血バス」が 53.4%で最も接触率が高く、次いで「街頭での呼びかけ」(52.9%)、「テレビ」(46.0%)、「献血ルーム前の看板・表示」(43.6%)と続いていた。その他の媒体の

接触率は 2 割以下となっていた。職業別では、「献血バス」は大学生・専門学校生 (59.6%) と専業主婦 (63.0%) で接触率が高かった。また専業主婦は「街頭での呼びかけ」(58.3%) 「献血ルーム前の看板・表示」(53.4%) も高く、現場での接触が目立っていた。自営業は「テレビ」(49.4%) が接触率の最も高い広告であることが特徴で、高校生は「献血バス」(36.3%)、「街頭での呼びかけ」(37.7%)、「献血ルーム前の看板・表示」(30.4%)、「献血関係のイベント」(12.3%) など、他の層と比べて総じて接触率が低く、いずれの広告も「見たことがない」人が 13.1% と高かった。「テレビ」に関しては高校生の 42.7% が接触しており、高校生の最も接触率が高い広告であった。性別では、女性で特に「献血バス」(61.7%)、「街頭での呼びかけ」(60.4%)、「献血ルーム前の看板・表示」(52.8%) といった現場での接触率が男性に比べて高かった。地域別では、「街頭での呼びかけ」は北海道 (37.4%) で特に低く、中国・四国 (47.8%) も他の地域と比べて低かった。「テレビ」は東北 (58.9%)、中国・四国 (54.1%)、九州・沖縄 (57.3%) で他の地域と比べて高く、関東甲信越 (37.1%) で低かった。

家族が献血している姿を見たことが「ある」という人は 11.0% で 1 割強に留まっていた。職業別では、専業主婦で見たことが「ある」人は 17.3% で、他の層と比べて高かった。性別では、見たことが「ある」人は男性 (8.4%) と比べて女性 (13.8%) の方が 5 ポイント上回っていた。地域別では、北海道で見たことが「ある」(7.3%) 人の割合が他の地域に比べてやや低かった。

友達に献血をしている人がいるかを尋ねたところ、「いる」が 32.8% と 3 割強、「いない」が 34.8%、「わからない」が 32.3% と回答が分かれた。職業別にみると、高校生で献血経験のある友人がいる人は 12.9% で 1 割強に留まり、他の層と比べて低いが、大学生・専門学校生では 41.4%、公務員では 58.7% が「いる」と回答しており他の層と比べて高かった。性別では、「いる」の割合が男性 (28.1%) に比べて女性 (37.7%) で 10 ポイント上回っていた。地域別では、東北で「いる」が 4 割弱 (38.2%) で他の地域と比べて高かった。